

〈研究〉門前町の歴史地理的研究：福岡県英彦山について

長野， 覺

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

3

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

1955-01-20

取水不能等があげられる。

4). その上、表流水に関しては東京都民の水源確保のため羽村堰における、村山、山口貯水池並びに玉川上水への吸水 $22.26 \text{ m}^3/\text{sec}$ の許可水量が羽村堰附近の平水量(約 $20 \text{ m}^3/\text{sec}$)を越えることとなり、これが下流域の流量に及ぼす影響も大きく、灌漑期における用水の絶対量を不足させている。

5). ところで表流水に対して地下水の賦存状態をみると(1953年10月20日～25日観測)(a)段丘上の地下水は基盤をなす三浦層群或は粘土層が不透水層をなし、その上部の礫層中に滞水し、その流動方向は地表傾斜と似た形をとり、段丘崖では基盤乃至粘土層と礫層との間から泉水湧出しているのを各所に認めることが出来る。(特に拝島から立川に至る間では枯れることのない泉とか池の如くに流れている泉がある)。(b)沖積地の地下水は段丘上で見られたような方向を示し現流路に対して大体 $40^\circ \sim 60^\circ$ の角度をもって流入し、多摩川を涵養している。ところでa, b両者とも地下水の給源とか、流量については未だ明らかでない。

従つてこれらの地下水が灌漑用水にどのように役立ち得るかは、小河内ダム完成後における $2 \text{ m}^3/\text{s}$ の水が羽村から放流されて、どのように表流水として灌漑用水に利用し得るかと同じように今后に残された重要課題と考えられる。又河床低下量と砂利採掘量から考えて、要するに上流からの流出土砂の関係とか上流地域の水位変化、ひいては水源林の持つ意義などが更に検討されなければならない。(1954, 12.1)

参 考 文 献

- (1) 福田理・羽島謙三 1952 武蔵野台地の地形と地質, 自然科学と博物館 19巻 9-10号
- (2) 米本卓介 1953 森林保全に関する多摩川水系流出量、堆砂に関する調査研究, 森林保全研究会 5号(中間報告)
- (3) 多田文男 1954 関東ロームの研究史, 地球科学 16号
- (4) 三井嘉都夫 1954 多摩川下流域に於ける河床変化と農業水利問題, 森林保全研究会 森林保全に関する研究 28年報告 4号。

門前町の歴史地理的研究 — 福岡県英彦山について —

長 野 覺

(1) は し が き

わが國の人口は明治初期の3500万から1世紀足らずの間に、都市集中と

いう形をとって9000万にも達しようとしている。しかし農、漁、山村においても緩慢なる増加の道をたどってきたのが通例であり、このような一連の人口動態の中にあつて、本論で述べるような逆行的な著しい人口減少を来した所があるとすれば、社会的問題として当然注目せねばなるまい。何故減少したか、減少に際してはどのような過程で推移したか、再び以前と同様、若しくはそれ以上の人口を維持できないものか等の検討することは必要であると思う。

こゝで取上げる門前町は、かつて修験道場として繁栄した福岡・大分両県にまたがる英彦山の場合である。修験道は本地垂迹説の实践的宗教として、その起源は今から約1000年以前の平安末期にさかのぼり、修験者は山伏とよばれた。かような神仏混雑の宗教が特に明治前の社会では広く大衆に信仰されていたことは、既に歴史家の認めるところである。英彦山も古くからこの道場として繁栄したことが知られていたが、1952年に海拔1200mの山頂で崖崩れがあり、その際約850年前の（永享元年11月27日銘入り）経文を納めて供養する銅製の経筒が発見されたことや、朝廷、大名等特権階級の寄造物の存在すること、記録の多いことから肯定される。しかし富の蓄積と権力の増大により、中世末の乱世には肥前の竜造寺氏、豊後の大友氏等地方の豪族と兵火を交え敗戦を喫したこともある。かような中世以前の門前町としての英彦山の状態は殆ど考察していないのでこれ以上触れないが、近世から明治時代にかけて門前町英彦山を形造ってきた経済的裏付けは、豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、肥後の六国（現在の福岡、佐賀、長崎、大分、熊本県）にわたる農家を壇那だんなと称して抱えていたことであつた。そして壇那百姓の参詣による宿泊料や、壇那を廻り歩いて（俗に“^{ある}旅き”と云う）祈禱をしたり、守護札を配布して得る布施すなわち謝礼金や米を金に替えて主な生活費とした。

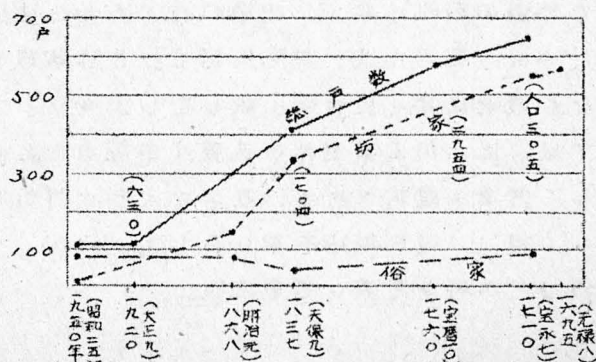
集落の構成は、山伏の家即ち坊家とこれに寄生的な農、商、駄人等の俗家が参道の両側に集り、明治の初め頃までは山間の町を形成していた。しかるに今日の英彦山は、集落形態としては依然として門前町をなしてはいるが、その機能は殆んど崩壊に残してしまつた。すなわち明治後期より今日にかけては、北九州工業地帯や筑豊炭田等の主として工鉱業従事者の集る観光地として経済が維持されている。かように門前町から観光集落への変化が何故起り、明治以後戸数は半減してしまつたが、その際どのように集落が解体して行つたか等を考察して見たい。

(2) 門前町的機能の衰退と戸数の減少

第1図は種々の資料から作製したもので、最古の戸数を示すものに元禄8年(1695年)坊家500余坊の記録があるが、宝永7年(1710年)にはかなり詳細に、山中の軒数637、内本坊230、庵室327、俗家80、人口3015とある。これは永禄11年(1568年)竜造寺氏の焼打に次いで、天正九年(1581年)大友氏来攻により3年間戦乱の巷と化し、宗教建造物、家屋、財産はほとんど灰燼に帰した後復興した英彦山の姿である。しかし最も繁栄したのは戦乱前で、800坊を数えたと伝えられる。ところで相次ぐ敗戦後も尚、元和8年(1616年)豊前領主細川忠興により大講堂(奉帝殿)が再建され、寛永14年(1637年)には佐賀藩主鍋島氏が鍋島居を寄進し、更に享保15年(1730年)聖元天皇の意向によりその島居にかゝげる額の寄進を受けたことや、宝暦4年(1754年)山頂の神社炎上のため鍋島氏が再建したり、一方英彦山産主(最高位者にして布施物を支配した)も京都の御所を始め諸公家へ僧を使って守護札の献上を屢々行うなど特権階級の尊信の程を物語っている。それにもかかわらず元禄以降の変遷を見ても判るように、大正初期に至るまで急激な戸数の減少を来していることを注目せねばならない。これは前書でも触れたように、特権階級の支持によって門前町英彦山が繁栄したものではなく、窮乏生活を送っていた中部、北部九州の農民の信仰の上に立って繁栄を保っていた結果に外ならない。しかるに絶対的魔力を持つと信じていた山伏が異教徒に破れたことは精神的に大きな衝撃を与え、また狂大な建造物を焼失破壊されたことは、表面的にも英彦山の威厳を失墜したであろう。その現れとして、かつて英彦山内では「殺生禁制、五穀耕作を禁制するなり。(元禄年中は耕作するものありて乱明ありて後ち享保年間より甚この制法に背けども改むる人なし……)……」という状態になった。農民の信仰心が萎らいでは参詣者が減少し、一方ではいわゆる

「^{ある}旅さ」に出かけても布施が少くなり、結局は英彦山の坊家は勿論これに寄生的な俗家は生活困難となり、自己の屋敷や檀家の権利を売りそれを資金として他に転出するものが多くなった。かような状態がつづいていたが、明治3年(1870年)神仏分離が行われ

第1図 英彦山の戸数変化

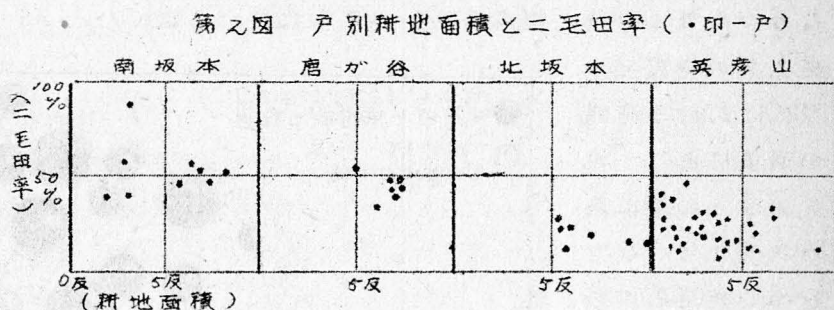


れると、わずかに大講堂（奉幣殿）を残し、他の仏教的色彩の建造物、宝物は一切破壊されるに至り、修験道場としての生命は消滅してしまつた。以上のように人心の離反と共に最後には政治的原因によつて門前町としての機能は停滞し戸口の減少を著しくしたものと思う。

(3) 観光集落的機能の発生と戸数減少の停滞

大正時代以降今日まで総戸数120戸を前後し、それ以下には減少しないことと戸数変遷上の大きな特徴といえる。何故更に減少しないだろうか、換言すれば120戸を支えているものは何であろうか。明治以降門前町的色彩の衰へた結果、集落の環境から推せば農林業に依存する山村的性格の濃くなることが予想される。そうすれば現在飽和的狀態にある耕地の面積から戸数の維持能力を考えると、第8図は大字英彦山の部落別に各農家の耕地面積（田、畑）と水

田の裏作率を現わしたものであるが、純山村的な南、北坂本、唐ヶ谷の1戸当り

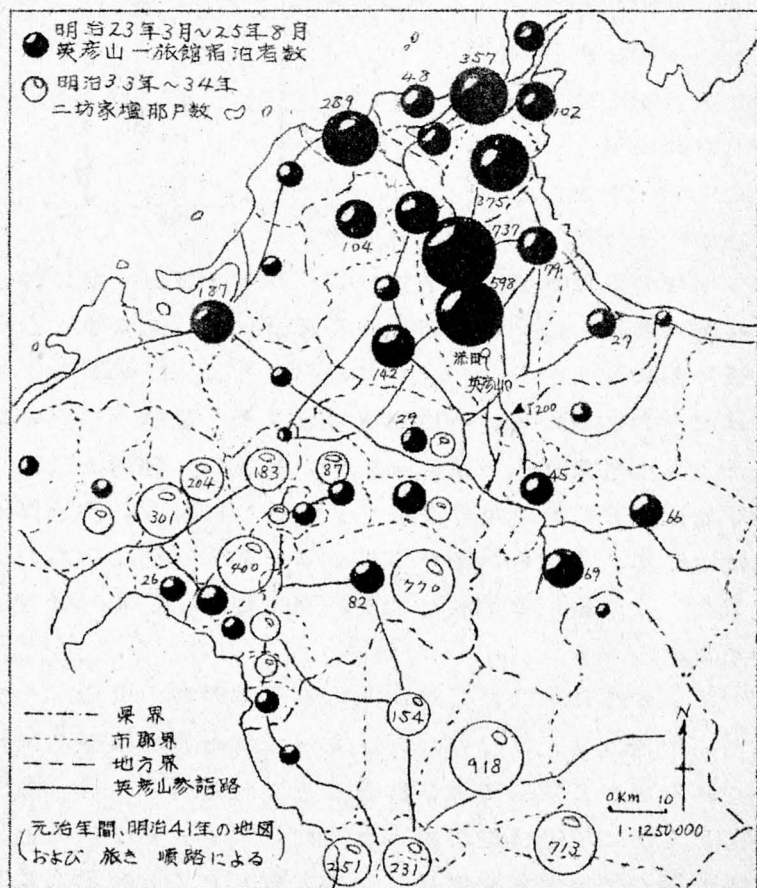


平均耕地面積が6.1反であることから、現在の自然的、社会的条件の下では狭義の英彦山内では（広義の英彦山は南、北坂本、唐ヶ谷を含む）総耕地面積約8町5反であり13戸しか維持できにくい。然るに農家だけでも24戸（内専業8戸）而してその平均面積は3.4反、反収4～5俵という零細な有様である。更に農家以外の家は75戸にも達し、計算上過剰な約85戸は何か山村経済以外のものに維持されていることになる。即ち観光地的経済が之である。従つてかゝる性格が無かつたとするならば更に戸数の減少を見たであろうし、また、逆に観光地的性格を更に強く推進して客を誘致すれば戸数の増加が望める。

ところで観光地的機能の発展は社会的環境の変化、つまり内部的には修験道信仰の衰退と、外部的には北九州工業地帯と筑豊炭田の発展に比例して促進されたであろうと予想されるので、北九州における鉱工業発展の考察も必要になるがここでは結果的に見るに止める。炭田の発達の方が工業地帯の形成より早く、英国式の汽罐と機械を取入れて近代的石炭鉱業を始めたのは明治14年現在の飯塚市外の一炭坑に始まり、日清戦争を契機として筑豊炭田全域

に急速に発展した。一方明治34年には東洋一を誇る八幡製鉄所が操業を始めそれと前後して機械、製鋼、紡績、セメント等のいわゆる北九州工業地帯が形成されて行った。炭坑もまた工業の発展と共に益々開発され、明治40年代には鉱山、工業ともに殆ど今日の基礎が出来上った。以上のことから観光地的性格を帯びてきたのもほぼ明治末期からと推定される。しかし実際には明治以来神道を国教としたので思想的にも神社崇拜が盛んとなり、真の観光集落とは云えないだろう。第3図は英彦山登山者の出身地を知るため、まず門前町的色彩の濃い時代の推定資料として明治33年～35年にかけての二坊家の壇那帳から壇那の分布を現在の市郡別に整理してみた。その結果、筑後、肥後、肥前に多く、こゝから年を通じて壇那客が参詣にきて、その坊家に泊っていたわけである。もっとも他の坊家では筑前、豊前、豊後に壇那を持つ所も多いが、当時の産業人口の上から云っても筑紫平野、肥後平野の壇那数には及ばなかった事は容易に想像できる。然るに先にも述べたように北九州における鉱工業の発展と、

筑前における信仰の衰退により、北九州からの登山者が次第に多くなり、かつて参詣者の多かった筑後、肥前、肥後方面からは参詣者が減少し始めた。この漸移的資料をまだ入手していないが、昭和15年9月～16年10月の一旅館宿帳による登山者の出身地は別表のように、既に1、2、3、4、の北九州地方が76%を占める程になっている。しかしなお筑後地方は筑



第3図 最近の宿泊登山者と明治時代の壇那分布

豊地方に次ぐ比率を占めていることは農民の神社参拝が盛んだったことを物語る。

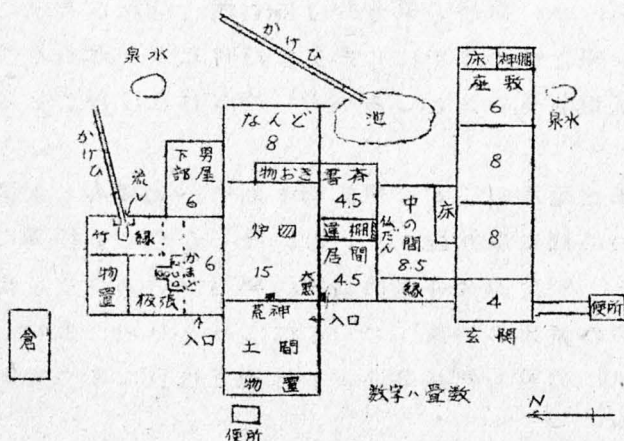
地方別宿泊登山者数 (同一旅館の常帳による)

観光集落としての性格を決定づけたのは昭和20年以後である。23年3月～25年8月までの宿泊登山者は第3図と別表から判るように、地元筑豊地方を筆頭に1, 2, 3などの都市地方が著しく増大し、4, 5, 6, 7などの農村地方は著しく減少してしまつた。そして英彦山の集落自体も大きな

(地 方 別)	昭和15年9月 ～16年10月		昭和23年3月 ～25年8月	
	人 数	百分率	人 数	百分率
1. 北九州五市と下関市	1,233	37.1	1,043	25.7
2. 筑豊地方 (直方, 飯塚, 田川市と 速賀, 養手, 田川, 嘉穂郡)	902	27.2	2,068	51.0
3. 福岡地方 (福岡市と宗像, 糟屋 郡, 筑紫, 早良, 糸島郡)	180	5.4	228	5.6
4. 京都, 筑上地方 (京都, 筑上郡)	218	6.6	106	2.6
5. 筑後地方 (久留米, 大牟田市, 朝倉三井 淳羽, 八女, 三瀬山門三池郡)	479	14.5	312	7.7
6. 佐賀県	119	3.6	44	1.1
7. 熊本県	42	1.3	17	0.4
8. 大分県	90	2.7	198	4.9
9. その他	53	1.6	39	1.0
総 計	3,316	100	4,055	100

変化が生じた。旅館の新築, 増築, 果営ヒユッテの設置, 観光道路の建設, 山の家の発生, 更に25年には国定公園に指定されるに至り, 外部的にも内部的にも観光地としての性格が著しくなった。"山の家"は20年以前にはなかったものであつたが, 25年初めまでに4戸でき, 29年現在では13戸にも及んだ。これは勤労者の厚生施設という点から工場鉦山が健康保険組合を通じて設置するものであり, 何れも大工場鉦山に限られその設置した工場鉦山の従業員だけが利用するのでこの点中小企業の当面する社会的な問題の一面面が現われている。山の家13戸の内9戸は坊家を借りたものであり, 2戸は普

通の家を, 残りの2戸は新築したものであるが何れも旧坊家の屋敷跡に建てられた。坊家よりの転向が多いのは, かつて塩那客の宿泊所であつた関係上その原形は第4図に示したような普通の民家より大規模で, 新築するより経済的にも位置的にも有利な条件を備えていたからである。



第4図 坊家の間取り

(4) 明治以前の集落

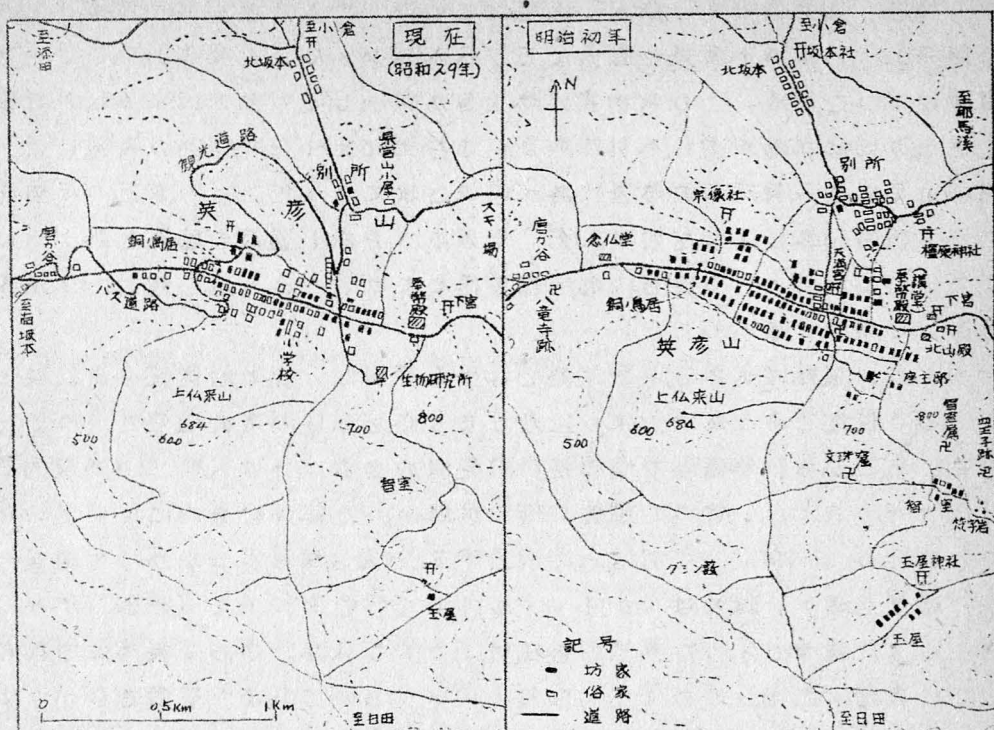
かつて600戸を起していた門前町が今日約130戸に減少したが、集落立地の上ではどのような変化を生じたであろうか。明治前の集落位置と戸数を明確に示す資料がないので英彦山神社所蔵の明治初年坊中屋敷図を第5図に整理し、その他文献と知り得る範囲の屋敷跡を手掛として、過去の集落位置を考察した。第5図で判るように現在の中心部は奉幣殿から銅の島居までの間であるが、ここでも唐ヶ谷まで屋敷跡が続いており過去の繁栄がしのばれる。しかしかつてこの通りは裏参道であり、北坂本～別所の通りが表参道であったことが古地図類や、元禄1年(1688年=戸数600戸を越えていた頃)の本朝年代記に記載されている。表参道なら戸数も明治初年図よりもっと多かったであろう。寺実室暦年間の記録に別所に100余戸とあり、俚諺にも「別所百軒倉一つ」というのがある。百軒もあるのに倉を持つような家は一軒だという意味だろうが、元来坊家は倉を持つ家が多いと云うことと、別所という地名、表参道という位置から考えて座主の別院があつた所と思われる。そして他は倉をもたない農、商、匠人などの俗家だったということが推測され、明治初年図にはまだかなり坊家以外の家屋も密集していて名残を止めている。

次に智室と玉屋の谷である。この方面は英彦山でも歴史の古い所といわれ、智室谷頭の大岸壁に嘉禎3年(1237年)銘入りの梵字が彫刻されており、正和2年(1313年)の玉葉集には玉屋の歌が記載されていて一応肯定できる。屋敷跡も多く残っているが戸数に関しては不明である。

距離の関係上図版には見えないが、別所の東方約3kmの所に神社がありこの附近を豊前坊と呼んでいる。現在はわずかにノ戸あるだけだが、地名や参道の両側に坊の跡らしいものが相当見当るところから、坊の存在したことは確である。

かように繁栄期の英彦山は峯を越えるごとに豊前坊、別所～北坂本、大講堂～唐ヶ谷、智室、玉屋などの谷間に家が運つていた。そして谷々の谷頭には必ず寺社が存在したことから、英彦山全体が門前町の集合体であつたと思われる。以上のような明治前の各集落の消長についてはこれくらいに止め、明治初年と現在について検討し、消滅した集落あるいは現在位置に残つた集落の原因を考えよう。

(5) 明治以降の集落立地と機能の変化



第5図 門前町の過去と現在。

各集落の特質上、①智室、玉屋方面、②北坂本、別所方面、③現在の中心部の三群に分けて考えることにした。なお豊前坊方面は明治初年以來今日まで1戸あるだけで変化がなかったのを論外とした。

①この方面は明治初年までは智室6戸、玉屋に8戸あったが今日玉屋に1戸残すだけで殆んど集落は消滅した形である。英彦山の戸数が絶対的にも減少しつつある時。早くこの集落を消滅させた原因が二つ考えられる。一つは玉屋、智室方面は仏教的建造物が多かったので、神仏分離以來省りみられなくなり参詣者の減少に拍車をかけたこと。いま一つは交通路の変遷により(第3図参照)かつて豊後からの参詣者は玉屋、智室を過ってくるのが最短路であり、玉屋は豊後から英彦山への入口をなしていた。ところが明治22年〜40年頃までに工鉱業発展に伴い、今日の北九州の鉄道網は殆んど完成され、九州一円からの登山者は筑豊南端の鉄道終点添田町まで至り、これより徒歩12km、南坂本、殊に前者を多く通つて英彦山に来るようになったのでこの参詣路を除いては若しくさびれ、玉屋、智室の人々は英彦山外へ転出したり、或は現在の中心部へ移動してしまつた。

②かつて表参道だったこの方面は、坊家の需用に応じる農民、雇人(屋根

みき、桶屋、鍛冶屋等）、商人、医者などの俗家により主として構成されていた関係上、坊家の不景気や転出は忽ち収入減少となって英彦山内での生活が困難になってくる。この点坊家は参詣客が減少しても旅あるきによる収入で生活できたのとは立場が違い不利である。また先に述べた交通路の変遷により大部分は南坂本へ英彦山の参道に客が吸収されて行ったことも衰退の原因であらう。明治初年にはまだ別前33戸、北坂本13戸あり過去あつたの面影をわずかに止めている。なおこの医者ごせんいは俗に御殿医とよばれていたが、明治20年頃家財を売って東京へ転出した。

③かつての裏参道が現在中心業務となった原因は、観光的功能への転換ともからんで複雑であるが次のように考える。各坊家は特定の壇郡を持つていたので、そこからの参詣者も壇郡権利の売買の直後以外は大体年中不変的であつたと考えてよい。従つて壇郡の信仰が厚かつた間は経済的には安定的だつたといえる（一例として明治20年頃通常年2回延日数60日かかつて筑前一氣微一肥前を廻り、収入は40円〜50円ぐらいであつた（当時米一升4〜5文））。また競争によつて参詣者を獲得するのではないから、英彦山内ならばどこに集落が立地しても位置的な優位というものはあまり問題でなかつた。ところが神仏分離に際して大藏堂は神社に切替へられたので、山中最大の信仰対象建造物として寺院のなくなつた英彦山においては固然参詣者が集り、また老幼婦女子はこゝまでくれば英彦山に参詣したといえるという観念をつくり、この参道筋に客が集つた。これをいつそう促進させたのは大正に入つて添田へ英彦山（銅ノ島居）に索道が整備され、自動車が運搬されるようになるのと全く登山者は銅ノ島居へ参詣殿に吸収された。しかしそれでもなお英彦山全体としては参詣宿泊者の数は減少し、このため明治初年14戸あつた坊家は、今日では37戸に減少し、その摩訶不思議は他所から転入した百姓により（英彦山周辺の山村出身者が多い）多くは水田化されて行つた。

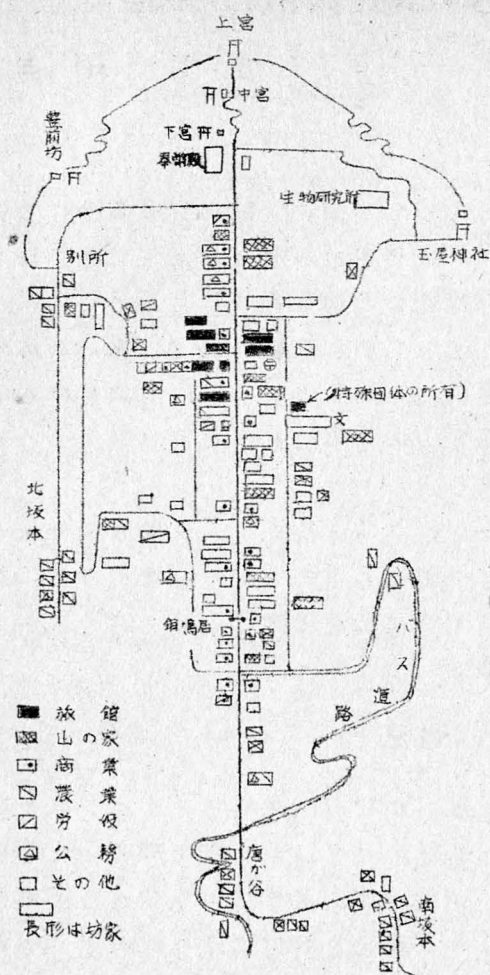
さて坊家の転出したあと、その壇郡客が参詣に来ても既に宿泊する坊がなく、こゝに旅館の必要性が生じた。また明治20年以降は北九州の発展期でもあり、坊家とは縁故のない参詣者が増加したことも原因となつて、8軒の旅館が明治20年から明治末までに出来上つている（それ以前には旅館はない）。旅館の取扱業は質屋2、雜貨商2、呉服屋1、坊家3、であるが、その取扱前坊家であつたものも含めると結局6軒が坊より転向したことになる。また旅館の位置は第6図に示したように、登山路の分岐点に当り、4軒は他の場所から移動して来たものである。現在商店は兼業も含めて26戸あり殆ど参道両側を占めている。かように旅館、商店等は競争上その立地要因に敏感で

あるが、最近の“山の家”は競争的なものではないので参道からはずれた坊家もこれに転向するものが多い。

以上のような機構をもち、過程を経て今日の中心的集落が形成された。

(6) むすび

門前町の過去をかえりみると、信仰から発生した種々の経済的裏付けにより発展したことが判る。従つて集落は信仰というものと常に相關々係にあり、信仰の衰退は門前町にとっては致命的打撃となり、慣性的な集落維持は殆ど望めない。成田や身延、琴平等は伝統的信仰の維持に成功したものであろうが、それでもなお小地域の中心都市的機能を併せて繁栄している。門前町英彦山の衰退の最終的原因は神仏分離により以後修験道は消滅したことで、わずかに往時の名残を奉幣殿に止めその参道両側に周辺から移動してきた家が連なつてはいたものゝ、転出する者の方が多く衰退の一途をたどり、交通不便な山間地域ではあり殆んど山村



第8図 集落の販業構成

化せんとした際、北九州の発展という周辺の社会的環境の変化と、英彦山の自然が景勝と四季の変化に富むという条件を備えていたため、山村として収容可能以上の戸数を、形態的には門前町であるが観光集落としての機構に切替ることにより今日維持している。そして今日設置した工場、鉾山以外の従業員は恩恵に浴せぬという問題を含む厚生施設“山の家”にも見られる保養的な色彩も濃くなり、わずかながら戸数も増加の傾向にあり、集落自体としても発展の希望が持てるに至った。しかし震村からの登山者が著しく減少している事実は、信仰が衰へたから致し方ないという事とは別問題に、これらの人々が観光と保養に登山できるような社会的環境を作らねば農民の向上も、また観光地英彦山の発展も健全なものではないだろう。(1954, 3, 31)